

主語認定について

— 文脈把握のための必須タスク —

元・四谷学院非常勤講師 伊東 慈子

「単語、覚えました。文法も一通りやりました。でも、読解問題でなかなか点が取れないんです。どういう話か今イチつかめなくて……」
こんな悩みを持つ受験生は多いと思います。

日本語は主語の省略が多い言語です。古文であつてもそれは変わりません。その省略された主語的確につかめなければ、その話がどんな話なのか分かるはずがありません。文脈を把握するには主語認定作業が必須なのです。

その作業に慣れさせるには補助プリントを用いたトレーニングが効果的——そのように考え、私が予備校講師として実践してきた指導の一部をご紹介します。

次は、2学期後半高卒生中級クラスの授業で実際に使用したプリントの一部です。その単元で扱う文章をワープロ打ちし、要所要所に人物名を書き込むスペースを設けてあります。

プリント使用の前に、『主語認定の法則』として「て」「ば」などの接続助詞や敬語が役に立つことをおさえます。ただし、この法則は100%適用可ではないため、必ず場面を思い浮かべ

ながら使うように、と一言添えます。

夢よりもはかなき世の中を、 <small>(私と故宮の)</small> 「再やかなり」 木の下くらがりもてゆく。築土の上の草あをやかな <small>宋の葉が繁つたんだん時なつていく</small>
～ はながむるほどに、近き透垣のもとに人のけは さぶらひし小舎人童なりけり。あはれにももののおげ 5 久しく～ は見えざりつる。遠ざかる昔のなごりに <small>名親として呼</small>

プリント配布後、以下の手順で授業を行います。
(1) 範読を聞きながら本文を目で追い、空欄に人物名を書き込むという作業をさせる。

(2) 授業前に板書しておいた本文に、空欄に入る人物名その他、文法や現代語訳などの重要事項を色チョークで書き込みながら解説。生徒は板書内容を自分のプリントに書き写す。

(3) 本文解説途中もしくは終了後に、設問解説。
このようなスタイルで授業を行おうと考えたきっかけは、生徒に古文学習に対する主体的な取り組みを促したいとの思いでした。先生の説

明を聞き、自分でポイントを掴んでノートにまとめしていくことのできる生徒は、ごく一部のみなり力のある生徒です。一方で、どのように勉強してよいかさえも分からない生徒が相当数います。そのような生徒でも、この補助プリントのナビゲーションに従い、自分の頭と身体(手)を使ってトレーニングを積むことによつて、徐々に主語認定のコツを掴んでいきます。

さらに応用編として、センター試験過去問などの比較的長めの素材を扱う場合は、主語認定のための空欄だけでなく、文脈把握に重要な部分を太字にし、大筋確認のセクションを設けた速読トレーニング用プリントを使用しました。

「主語がわかれば古文は読める！」是非、このことを生徒たちに実感させてください。

※本論で紹介した指導法の詳細に関しては、拙著「スピード・リーディング古文トレーニング」(二〇〇八年・開拓社)をご参照いただければ幸いです。